

---

# 純白の心に血色の模様

緋翠

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

純白の心に血色の模様

### 【Nコード】

N7000F

### 【作者名】

緋翠

### 【あらすじ】

ただ普通に過ごしたかった。そう願っていたある野球部相手にゲームが始まる。「皆様にはゲームをしてもらいます。」その一言で始まって殺し合いという名のゲーム。平凡な日常に戻ることはできるのか、生きて帰ることができるのか。始まる裏切りの連鎖。野球部の運命はどうなるのか。

## FILE 0：プロローグ（前書き）

この物語は、バッドエンドで終わる可能性が高いです。

できるだけ、早く更新できるようにがんばりますが、遅くなる可能性のあることをご了承ください。

感想・ご指摘等お待ちしております。

## FILE 0：プロローグ

「やっぱり、行ってしまうのね。」

悲しみを含んだ声がコンクリートのビルの間で反響する。

「俺のことはもう忘れろ」

黒いコートに身を包んだ男はただそうつと反対方向に向かって進みだした。

冷たい風が吹く。

周りのビルからの灯はなかった。ただ月の光があたりを照らす。

「・・・さようなら、私の愛する人。」

女は十分の間を空けた後搾り出すように口を開いた。

その声は心なしに震えていた。

遠くの闇にパトカーのサイレンが小さく聞こえた。

## FILE1：偽りの平穩I（前書き）

FILE1は、何回かにわたってお送りします。

これ以後、このようなことがあると思いますので、ご了承ください。  
また、ご意見、ご感想を募集しています。

## FILE 1：偽りの平穩I

「終わったー!!」

チャイムが鳴りおわった数秒後、  
とてつもなく大きな声が教室に木霊する。

「和磨がこんなのでいいのか・・・」

仮にも部長ならもつと威厳をも

「はいはい、もういいだろ、聯弩？」

悪かったな、威厳がなくて。」

ブツブツと言い出す少年を大声でしゃべった少年がほんの少しの怒  
をにじませた声でとめる。

肩まである茶髪の髪が少しゆれた。

その声によつと文句を言うことをやめた少年の方耳に一連のシンプ  
ルなピアスがあるところを見ると、

この学校、かなり校風が自由なのがうかがえる。

未だに不満そうな顔をしているのが聯弩<sup>れんど</sup>。

表情を一転させ、明るい表情で前を歩いているのが和磨<sup>かずま</sup>というらし  
い。

「生島先輩!!」

「ああ、健か。」

「これから部活つすよね。」

「一緒に行きませんか？」

「ああ、いいぜ。」

聯弩もいるけどな。」

「!! 藤城先輩、居たんつすか!？」

「失礼な・・・一年生ならもつと前に気づいて挨拶するべきだろう。」

・

まさか、菊地はわざと無視をし

「まあまあ、健に限ってそんなことは無いさ。  
疑いすぎだぞ、聯弩。」

一年生だというこの元気な少年いや、  
菊地健によると和磨という男は、姓を生島。  
聯弩という男は姓を藤城ふじぎというらしい。

そのまま、たわいのない世間話が続く。

健が話しかけ、聯弩が文句をいい、和磨が止める。

それは、いつものことのように、

それが日常であるような自然さで行われていた。

「ついたぞ。」

そういつて来たのは「野球部」と書かれている部室。

和磨は手馴れた様子でドアを開ける。

「いつも早いな。罽！」

「そうかな、僕はいつものように来ているだけだよ、和磨。」

「そんなことないっすよ、神權先輩、

いつも誰よりも早く着てるじゃないっすか！」

「なんだ、菊地。」

俺たちが遅いとしても言いたいのか、

いや、菊地に限ってそんなこと・・・

「違いますよー！」

藤城先輩！！

そんなことあるわけじゃないっすか！」

「そうかそれなら・・・

暗い部室の中、長髪の黒髪の少年がいた。

和磨はまるで、それが当然であるかのように、

満面の笑みを作って話しかける。

黒髪の少年、神權しんかいけい罽が、顔に微笑をたたえて否定する。

健が否定し、例のごとく健と聯弩の言い争いが始まってからも  
罽の微笑はとまることがなかった。

その微笑をたたえたまま、彼は漠然と呟いた。

「いつまで、この平穩が続くのだろうか・・・。」  
と、

「続けさせるさ。」

優勝したいんだ。このメンバーで。

中学最後の大会を。」

和磨が、力強い声で宣言した。

その顔は、自信と希望で満ちていた。

後に罅の懸念は現実になる。

近い将来、そのことを知っていたのは  
今ここにはいなかった。



## FILE 1：偽りの平穩EE（前書き）

長らくお待たせいたしましたすみません。

これからは、早めにupできるようにがんばりたいので、これからもよろしく願います。

## FILE 1：偽りの平穩II

外からは運動部たちの声が聞こえてくる中、  
此処、野球部の部室内では、異様な空気が流れていた。

「いくらなんでも、遅くない？信ちゃん」

大きなため息とともに大げさに肩をすくめて発言する彼に、  
隣にいた紺色の髪と、黒色の瞳の少年があきれたように発言する。

「俺は、アンタの遅刻癖のほうが酷いと思うがな、謙一。」

それに、アイツの遅刻癖はいつものことだろう？」

「おいおい、それは酷いだろう？」

仮にも監督に向かって。

何ならグラランドでも走ってみるか？

滋蛾。」

後ろからかった声に滋賀は一瞬驚いた顔をしてから  
心底嫌そうな顔をしてとても丁寧にはいえないような口調で断つた。

「グラランドなんて、冗談じゃない。絶対に嫌だね。」

「アホか！！優晴！！」

それが信ちゃんに怒られてるやつの言う言葉か！？

ちゃんとあやまれつつの！！」

ここぞというばかりに食って掛かる少年に滋賀はさらに辛辣な言葉を並べる。

「あんたに言われたくないね。この、右ボンバーヘッド。  
いつもよくそんなに寝癖をつけられるな。謙一。」

「ああ、お前も同罪だぞ、誹謗。」

「ええゝそんなゝ！！」

っていうか、これは元からだつつの！！・・・

後ろで、まだ何かいつている謙一を見事に無視して

監督、由布院信吾、通称信ちゃんは部員を見渡し連絡事項を話していた。

「皆に集まって貰ったのは、

一週間後に、合宿決定したからだ。」

なんでもないようにいつたその瞬間に部活内にどよめきが起こった。

「すみません。何で急に合宿なんて？」

部員全員の疑問を代弁するように部長、和磨は戸惑いながらも疑問を口にする。

その当然とも言える疑問に監督は晴れ晴れと言つてのけた。

「今日決まったからだ。」

なんでもないように言つてのけたその言葉に、

野球部一同声が出なかつたのは、

見間違えではないだろう。

「信じられないな・・・あのアホ監督。そう思わないか、絆創膏男。」

「

同感、つていうか、アンナン監督やつて言い訳!？」

帰り道、心底馬鹿にしている様子の優晴に、

何度も頷いて同意しているのは、健だった。

鼻に常につけている絆創膏からそのあだ名がついたらしい。

常ならばそのあだ名に反抗する健だったが、

今回はそうするつもりもないらしい。

「つていうより、

監督、信ちゃん殻誰かに代わって欲しいよね。」

「お前は黙つてろ!!」「」

「うわぁ・・・ひでえ・・・」

謙一の声に二人同時に叫ぶ。

まだ、何かいつている謙一を差し置いて

又、監督の愚痴を言い始める。

三人の反応がなれているのは、  
きっとこれが日常なのだろう。  
三人の顔には、笑顔があふれていた。

**FILE 1：偽りの平穩III（前書き）**

遅くなってしまうて申し訳ありません。  
これで、FILE 1は終了です。

## FILE 1：偽りの平穩III

「和ちゃん!!」

部長こと、生島和磨に抱きついたのは、

赤色の天パーの髪が異様に印象に残る少年・霧島栄介きりしまえいすけだつた。

「おいやめろつて、栄介!!」

「酷いな、和ちゃん。」

そういつの、部長はもつとのりがよくなきやいけないんだよ?」

「そんな小首を傾けても可愛くなんかあるか!!」

「そういつのを人権損害つて言うんだよ?」

「これだけなつてたまるか!!」

「・・・先輩・・・」

「栄介!!」

二人は小学生並みの言い争い(・・・もとい、和磨が怒鳴り散らす。

)

をしている所で後ろからの声に二人＋一人はそろつて振り向き、

ポニーテールの黒髪と同級生を認めると

そのまま一人をおいてそのまま前を向き無言で足を進めた。

心なしか、二人の顔が引きつっているのが気になるが、

そこは気にしないでおう。

だが、そのまま彼女は早足でそのまま栄介の背後に近寄ると・・・

そのままかばんで・・・

「無視してんじゃないわよ!!」

パソコン!!

小気味いい音が当たり一面に広がる。

「いったいな、麗華れいか!!」

「いったいな。じゃないでしょ、栄介!!」

何彼女おいてつてんの!!」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「無言になんなー!」

この二人の言い争いに置いておかれた+1名・・・  
もとい後輩は必死に頭を整理しようと小言で先ほどの台詞を繰り返す。

「麗華・・・彼女・・・彼女!」

頭を整理し終えたらしい後輩が、驚愕の声を漏らす。

その声とともにピンで留めた黒髪の前髪がゆれる。

驚愕している後輩を落ち着かせようと和磨は  
前にある少し低めの肩を二回たたく。

「落ち着こーぜ、心事」

「どうやって落ち着けていうんですか!」

「いいから・・・」

「・・・・・・・・すみません、せんぱい。取り乱してしまって・・・」

我に返ったらしい後輩、秋冷<sup>しゅうれいしんじ</sup>心事は顔を赤く染めてから  
あわてて謝った。

「別に謝ることでもないさ。」

「はい・・・。」

でも、先輩・・・あの人は?

風牲<sup>ふうせい</sup>麗華、栄介の幼馴染で恋人。

俺らと同じ中三さ。」

「・・・そうですか・・・」

「さて、馬にけられないうちに俺たちは退散するとするか!」

「・・・はい」

そのまま二人はいまだ言い争いをしている二人をおいて帰っていった。

「ねえ・・・いつまでこんな演技を続けていくつもりなの?」  
突如言い争いをやめた麗華は小さくつぶやく。

それに答えたのは「さあな」というたったの一言だった。

「もう帰ろうよ、麗華！」

そういうと同時に走っていく栄介を追いかけて麗華が走り去ると後にはもう何もなかった。

〈合宿一週間前〉



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7000f/>

---

純白の心に血色の模様

2010年12月10日02時43分発行